集素の存在を認めた。凝集素の検出率はO型が100%で最高でありA型、B型は夫々92.4%、81.8%で大差はない。凝集價は最高240倍で、60倍の12例が最も多い。患者の重軽症別による凝集價の差は判然としない。又病型より見て混合型の肺結核では滲出型に比して凝集價は幾分低いようであるが判然とした相違は認められない。

（2） 23例の唾液に就て同種赤血球凝集反應により唾液中の凝集素を検索し、之と喀痰の場合を比較した。検出率は唾液は73.1%で喀痰に劣る。血液型別に見てO型で100%なるは喀痰の場合と同様である。凝集價は最高20倍で喀痰に比して相当の差がある。同一例の喀痰と唾液の凝集價を比較するに大多数例に於て喀痰の凝集價が大であつて、唾液の凝集價に対して最高30倍の値を示した。次に凝集價を重軽症別、病型別に見た場合判然たる相違は認められない。又、両者の凝集價の大小には並行関係は認められず、又両者に於ける凝集素排出の有無も同一例に就て必ずしも一致していない。

（3） 血清と喀痰の凝集價を比較するに例外なく血清の凝集價が大で、喀痰の凝集價に対して最高426.7倍の値を示した。尙両者の凝集價の間には大多数例に於ては大小の並行関係は認められないがO型の6例で或程度の並行関係が見られた。

（4） 同一例の血清、喀痰及び唾液の三者を通じての凝集價の並行関係は認められない。

（5） 同種赤血球凝集阻止反應により26例の肺結核患者の喀痰中の凝集阻止物質を検索し、22例(83.6%)に証明した。検出率はAB型が100%で最高であり、A型、B型は夫々92.4%、72.7%であつた。阻止價は最高1920倍であり、尙重症例でも阻止價は必ずしも減少していない。

（6） 同じ26例について、同種赤血球凝集阻止反應により唾液中の凝集阻止物質を検索し、之と喀痰の場合を比較した。検出率は唾液100%で喀痰に優り、尙、又阻止價に於ても大多数例で唾液が優つている。即ち唾液の阻止價は最高5120倍であり、喀痰の阻止價に対して最高85.3倍の値を示した。尙重症例でも阻止價は必ずしも減少していないことは喀痰の場合と同様である。

更に又、両者の阻止價の間には大小の並行関係は認められず、又両者に於ける阻止物質排出の有無も一致しない。

（7） 同一例の喀痰に就て、凝集素と阻止物質との関係を検討して次の所見を得た。即ち検出率は両者大差ないが、有効稀釈度では阻止物質が優つており、凝集素に比してより大なる稀釈度に於ても有効である。尙両者の大小には並行関係は認められず、更に両者の排出の有無も一致していない。次に耐熱性を見るに、100°C 10分間の加熱により凝集素はその作用を失うに反し阻止作用は失われない。尙氷室に保存する場合両者とも数ケ月に亙りその作用を保つ。

本稿を終えるに臨み、終始御懇篤なる御指導と御鞭達を賜わつた恩師美甘教授に満腔の謝意を表わす次第である。

参考文献

1. F Schiff u H. Sasaki: Zeitschr. f. Immun. 77, 101—129, 1932
2. 鈴木壽六：十全会雑誌、41巻(上)、903頁、昭和11年
3. 柳下晃：金沢医大結核研究所年報、第四年、1～6頁、昭和21年
4. 浅田一：社会医学誌、515号、1099頁、昭和4年
5. 吉田寛一：社会医学誌、498号、661頁、昭和3年 499号、748頁、昭和3年

訂　正

第25巻第12号第1項，高崎五郎氏の「結核皮内反応の研究」論文中下記の文印刷洩れにつき追加します。

右段第14行目終りから三字目の前に下の文を入れる。

『遠心沈澱を行い（300回，30分間），上清を蒸発皿に移し原量の約1/10位に濃縮後，』